
君よ、僕をどう思う

鹿島 茜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君よ、僕をどう思う

【Nコード】

N0545G

【作者名】

鹿島 茜

【あらすじ】

妻と離婚した、ある男。彼は友人にその顛末を語り始める。

君、氷の様な冷たい人間という奴に会ったことはあるかい。

なアに、つまらない話なんだ。別に耳を傾けて聞く程のものでもない。かつて僕がちよいと好いてしまった人の事なのだ。

なんだいな色恋沙汰の話となると身を乗り出すのか。結構な事だ。どうだ、僕も隅に置けないだろう。まア、君ほどもてる男ではないがね、僕みたいに一風変わった男の相手をしてくれる人もいるってことさ。

その人はね、そうだな仮にKさんと言っておこうか、Kさんは大層優しい人でね。それでいてなかなかの男勝りな部分があつて、僕の方が男の癖にすっかり頼り甲斐のある人だと兄貴を慕うような心持ちになつてしまったこともあつたよ。

うん、君程度には頼り甲斐があつたかも知れん。おいおい何も怒る事はないじゃないか。君もすっかりしている、僕は君を頼りにしてるぞ。

で、そのKさんなのだがね、御両親がいずれも御高齢で長い間看病や介護ばかりする毎日だった。過去形で言つてしまつたから誤解されると困るのだが、御両親は今やすっかり元気だ。我が子の看病が良く効いたのだろうな。僕なんかよりもピンシャンしているだろうな。

Kさんにはそんな家族的背景があったものだから、僕が風邪など引いてしまった時にはしょっちゅう看病に来てくれたものだ。全く身体の虚弱な僕だからね、独り者でもあるしKさんには随分と世話になってしまった。Kさんがいなければ君に来てもらっただろうがね。

ああもう、どうして君はそうやってすぐに怒るのだ。冗談の通じない奴だ。盟友が病で寝込んでいる時に助けに来てもくれないのか。全く冷たい奴だ。

ああ、これも冗談だよ、僕だったら君が病気になったら看病に行つてやつても構わないぜ。

最初はただの友人だったのさ、Kさんとは。しかしね、いつの間にか付き合うようになってしまったのだな。

今にして思い出せば、Kさんから「お付き合いしましょう」と言われた気もするが、僕から言い出した様な気もする。いずれにしてもKさんの献身的なところや頼り甲斐のあるところや、色々ユニークな性格に好感を持っていた僕としては、断る理由もなく受け入れたよ。色恋に縁のないこの僕がねえ。自分でも不思議な気分になったものだ。

初めてデイトとやらに行つてみたのは、春も終わりがけの新緑が美しい頃だったと記憶しているね。映画を観に行ったのだよ。最新作ではなくて、昔の白黒映画だ。二人ともその映画が好きだったものだが、運良く再公開している映画館を見つけただけのことさ。

結果のわかっている映画を観て、少しばかり銀座の街を散歩して、

食事をして帰った。もちろん僕がKさんを御自宅まで送り届けてね。

僕の仕事とKさんの仕事の休みが合う日を選んで、たまにデートに行ったりした。

君も御存知のように奥手な僕のことだから、手の一つも握ることはできなかったよ。そんなことをしなくても、十分に楽しかったしね。

Kさんも満足そうだった。僕には満足そうに感じられたよ。

やがて僕はKさんとの結婚を考え始めた。

やはりいい加減に付き合い続けるのも、男として恥ずかしいことだ。ここらで一人前の男らしく、身を固めてやろうかと人並みに考えた。

おい、何を笑っているのだ。僕が結婚を考えるのがそれほど可笑しいか、失敬な奴だ。お前こそまだ独り身じゃないか、結婚などと言い出したら一番に笑ってやるぞ。

兎も角、結婚するという事は生活が変わる訳だから少々煩わしいとも感じたが、Kさんならば上手に仕切ってくれるに違いないと言う確信もあつたしな。

細かい事は面倒だから端折るが、つまるところ僕はKさんと結婚したんだ。

知らなかっただろう、僕にも妻という家族がいた事がある。ご覧

の通り今は独りだがね。

子どもか、子どもはできなかった。Kさんが絶対に子どもはいらないと言つて聞かなかつたのだ。両家の二親のためにも孫の顔を見せてやった方がとも思つていたのだが、妻が嫌だと言い張るのなら仕方ない。僕も子どもが大好きという訳でもないので、無理強いはしなかつた。

Kさんは仕事も辞めて家に入った。

何、素晴らしい妻だつたよ。家事は何でもこなすし、料理も旨い。変人の僕なんかにはあもつたいない人だつた。ひよつとすると、これが人世の幸いというものかもしれないなと、しみじみ感じたことすらあつた。

僕は仕事に精を出して、暮らしに困らない様に頑張つて毎日をごしたよ。まア、元々好きな仕事じゃあなかつたが、Kさんとの暮らしを安定させる為なら我慢してもいいと思つていた。一家の大黒柱など、そんなものかもしれないな。

しかしね君、会社で上手いかない時期というものもあるだろう。そうだよな、仕事をしていれば色々とある。という事くらいはわかつてくれてもいいだろう、なあ。

上司からこつぴどくやられる日もあるし、下の者の仕事が遅かったり、全体に悪い流れになつてしまふ事などいくらでもある。

結婚してからしばらくは良かったのだが、半年もしたら仕事の方が上手くななくなつてきてしまったのだ。帰りは遅くなり、僕自身の機嫌も悪くなる。Kさんにもっと優しくしてやらなけりやと思つて

も、余りに疲れてそこまで気が回らんのだよ。

ああ、独り身の君にはわからんことだな、うん。今は当てつけだ。

忙しく機嫌の悪い日々が数か月続いたろうか。Kさんの様子がどんどんおかしくなっていたのだよ。

あんなに元気だったのに、笑顔一つ見せない。僕の機嫌が悪いからだろうと謝ったりもしたのだが、「仕事ですもの」と言っただけ。少しばかりの笑みを浮かべるだけだ。

そのうちに、おかしさはどんどん高まっていった。家の中は掃除が出来ていない、取り入れた洗濯物が畳の上に山積みになっている、出て来る食事はいい加減、まるで人が変わってしまったようだったよ。

こちらにも徐々に腹が立つてきて、怒鳴った事まであった。僕は一日中仕事で疲れているんだ、家にいるだけのお前が何故そんな風になっちまったのだとね。

するとどうだい、突然ワアワアと泣き出す始末だ。僕は理由を聞ききたかっただけなのに、泣いているばかりで会話にもならん。仕方なく放っておいて風呂を自分で湧かして入って寝る。毎日がこの有り様で、我が家は荒廃していったよ。

Kさんは日に日に痩せ衰えていった。顔色も悪くなっていった。どうも何も食べていないらしくあったのだ。

僕は仕事で朝から深夜まで不在だからわからなかったが、どうも食べている様子がない。

ある日無理矢理に服を引っ剥がしてみたら、脇腹に肋骨がこりこりと浮き出していた。いつの間にかこんな哀れな身体になったかと、僕の方が泣きたくなかったさ。あの瞬間は今でも覚えている。

飯は食わん、泣いてばかり、眠ることもろくにできていない。どうだい、こりゃ病気だろう、君そう思わんか。

そこで僕は半休を取って、Kさんを医者に連れて行った。このまま死なれちゃ適わんからな。

結果は要するに気の病だ。

しかし理由が思い付かない。気がおかしくなる様な出来事があったとも思えんのだよ。僕が暴力沙汰を起こした訳でもあるまいし。

そこで少々金がかかるが、しばらくカウンセリングとかいう診療法を受けさせる事になった。Kさんの生まれや育ちから現在に至るまでの状況を色々と聞き出して、どうして気の病になったかを突き止めようという訳さ。

僕の同席は認められなかったよ。まずは本人しか入ってはいけなかった。そして次は僕一人だ。その度に仕事を休んだりして、散々だった。

家に二人で帰っても、鬱々として僕は逃げてしまいたかったよ。掃除や洗濯も僕がしたし、飯も下手だが僕が作った。しかしKさんは、ちっとだけ口を付けるだけで残してしまう。それも腹立たしく悲しく情けないものだった。

気の毒だとは思ったが、会話にならん人と話す事はできないしな。

結局のところ、ここまで切羽詰まってくると、Kさんの御両親に話すより他なくなってしまう。すぐに良くなるだろうと甘く見ていたんだな、僕は。

Kさんは一向に良くなるどころか、時々発狂したみたいに柱に頭をぶつけたり、包丁で自分の身体を切ろうとしたりするのだ。仕事など行っている場合じゃあないぜ。いつ自殺されるかわからない。一人にしておく事ができないのだ。

僕は意を決してKさんの御両親に速達を出した。Kさんが病気になるってしまった、これでは自分も仕事に行く事ができない、暫くで良いからKさんの看病を助けてくれないかと。

夫のつとめだと言われればそれまでだが、愛情深い御両親はすぐに飛んで来た。そして娘の変わり果てた様子に嘆きに嘆いて、そして僕を責め立てた。

僕としては何故責められねばならないのかわからないが、兎も角助けてもらわねば仕事にも行かれない。仕事に行かねばKさんとの生活が成り立たなくなってしまう。そう話したのだが、御両親は納得しない。娘がこうなったのは貴様の所為だと言って聞かないのだ。この僕がきちんとした愛情を娘に注いでいれば、決してこんな有り様にはならなかったと言うのだよ。

ああ、僕はもちろんKさんを愛していると反論したさ。僕としては愛している自覚はあった。

だがね君、恐ろしい事に愛情というものは自分の思った通りに相

手に通じるわけじゃないらしいのだよ。少なくとも向こうの御両親には僕のKさんへの愛情は理解されなかった様子だ。

すると今度は、御両親が近くに来てくれたら気分が少し落ち着いたのか、Kさんが初めて僕を見た。そうそう、もう長い事Kさんは僕の目を見てくれなかったのだ。どんなに僕がKさんを見ても、茫漠とした目であらぬ方向を見ているばかりでね。その時久しぶりに僕はKさんに会った気がしたよ。

そして何と言い出したと思う。僕はかなりショックを受けたがね。Kさんは僕を指差して、御母様、この方は氷の様に冷たいお心をお持ちなのです、私これ以上この方の妻でいなければならぬのでしたら私は死にたい、と言ったのさ。

この僕が氷の様に冷たい男なのだそうさ。Kさんが言うには、まるで僕がKさんの事を家政婦の様にしか見てくれないと言うのさ。自分の事しか考えていないエゴイストで、Kさんの事も自分の思い通りに動かそうとしか思っていなかったとね。

自分を愛する事しか知らず、私の気持ちは一度も受け止めてはくれなかったと。後は義母上に抱き着いて赤子の様に泣き喚くばかりだった。

御両親はね、それを聞いてあつという間に決意なさったらしい。その場で荷物を簡単に纏めて、愛娘を連れて家へ帰って行ったよ。

帰り際、義父上に僕は一発殴られた。御高齢だというのに凄い力だった。恐れ入ったよ。

後は御想像の通りだ。

貴様も文句はなかるうと言わんばかりに離婚届が送られてきた。もちろん僕はすぐに名前を書いて、印鑑を押して送り返した。嵐みたいな一年余りだった。

これで終わるのかと思っていたら、間もなく速達が届いた。Kさんの御両親からだ。

Kさんが投身自殺をしたとの便りだった。近くに出来たばかりの何階建てかのビルから飛び下りたらしい。

僕は衝撃を受けた事は受けたが、もう勘弁して欲しいと思ったのが本心なのだ。速達の中には僕宛の遺書が入っていて、たった一言

「氷の様に冷たい貴方様を愛した私が莫迦でした。貴方様は自分自身の事しか愛せない方だったのですね。お恨み申し上げます。」と震える字で書かれていた。本当に勘弁だ。

その時初めて僕は、Kさんをすっかり疎ましく思っていた事を自覚したよ。寧ろ死んでくれて清々したと言ってもいいくらいだ。生きたままで復讐しに来られても困るからな。何しろ僕は何も悪い事はしちやいないんだ。

そうだろう、君。僕は何か悪事を働いたろうか。

氷の様に冷たい人間というのはこの僕の事らしいのだが、困った事に僕にはとんと解らない。僕の何処がそんなに冷たかったのだろうか。

家庭を守る為に一生懸命働いたし、Kさんの事も大切にしてきた

と自分では思っている。それなのに彼女は僕を氷の様だと言う。どうしても解らないのだ。

なあ、君。僕を見てどう感じる。僕はそんなに冷たいだろうか。氷の様な男だろうか。

おい、なあ、何か言ってくれないか。どうして黙っているんだ。僕は知りたいのだ。

君くらいしか僕と話してくれる奴はいないのだよ。だんまりを決め込まれると、流石の僕も少しばかり淋しくなってくるじゃないか。

おっと、扉を叩く音が聞こえたな。誰かが訪ねて来た様だ。郵便屋か何かかも知れん。少し待っていてくれ。後でもう一杯、珈琲でもいれるからな。

「今日は、瀬田さん。ご気分は如何ですか」

「どちら様ですか。いきなり他人様の家にやって来て気分は如何とは失敬な。何ですか貴方は、白衣なぞ着て」

「ああ、これは申し訳ありませんでした。どうでしょう、少し私とお話しても致しませんか」

「今、友人が来ているのです。又にしては下さいませんか」

「左様ですか。ではまた機会がありましたら。今日のところは失礼致します」

ああ、すまんすまん。

最近妙な奴等が多いのだ。白衣を着て医者や看護婦の様な格好をして我が家へやって来るのだ。新手の押し売りか何かだろうかね。全く迷惑にも程がある。

君の所にも来るかい。それともこの界限だけだろうか。

そうだ、珈琲だったな。待たせて悪かった。用意するから、まあゆっくりしていつてくれたまえ。

それから君、さっきの話だ。ちゃんと誤魔化さずにきっぱりと話しておくれよ。

僕は本当に解らないのだ、僕の何が冷たいのか。僕は何も悪い事はしていないのに。

< 完 >

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0545g/>

君よ、僕をどう思う

2010年11月30日03時23分発行